

ホイアン日本町の近代

—近代日本の記憶の場として—

大 平 晃 久

I. はじめに

- (1) 記憶の場ホイアン
- (2) 研究方法

II. ホイアン研究史の検討

- (1) 『世界旅行名所図会』への登場
- (2) ホイアン認知以後
- (3) 研究の進展

III. ホイアンの心象地理

- (1) 南進論とホイアン
- (2) 角屋七郎兵衛の評価
- (3) ホイアン・日本関係の意味づけ
- (4) 現実への影響

IV. おわりに

I. はじめに

(1) 記憶の場ホイアン

ホイアン (Hoi-an)¹⁾ はベトナム中部に位置し、1999年に世界文化遺産に登録された旧市街で知られる町である。本稿は、近代における日本とホイアンの関わりに焦点を当てていく。ホイアンは、近世初頭に朱印船貿易を背景として日本町が存在したこと、また近年は日本でも人気の観光地になっていることでよく知られる。しかし、その間の時期、すなわち、明治から太平洋戦争終戦までの近代における日本とホイアンとの関係もきわめて濃密なものであった。日本の南進、すなわち、東

南アジアや太平洋地域への進出を背景として、専門書や一般書、各種雑誌、子ども向けの絵本に至るまで多くの出版物でホイアンは紹介され、少なくない人々がホイアンを実際に訪れた。

今日、こうした近代における日本-ホイアン関係はほとんど言及されない。内田²⁾、菊



図1 ホイアンと関連都市の位置

キーワード：記憶の場、日本町、近代、ベトナム、ホイアン

地³⁾などは当時のホイアンに関する文献を紹介している。しかし、そこに示されているのは、ホイアン日本町の整序され、ある意味で漂白された研究史でしかなく、当時の広範なホイアンへの関心をうかがうに足るものではない。ホイアン国際シンポジウムの報告書や野間の論考⁴⁾は、ホイアンに関する出版や研究が盛んであったことに触れてはいるが、具体的な出版物には論及していない。出版状況にまで触れたものは、三重中京大学地域社会研究所の研究グループによるホイアン日本町に関する文献目録⁵⁾に限られている。本稿ではこれらを発展させ、近代の日本－ホイアン関係の解明を目指す。

そのために、本稿ではホイアンを、近代日本における過去の再構成に一定の役割を果たした場所、すなわち、「記憶の場」ととらえる。歴史学、社会学、人文地理学などの分野では、国民やその他の集団による集合的な記憶のありように関心が向けられてきた。記憶の場 *lieux de mémoire* とはフランスの歴史家、ノラによる概念であり⁶⁾、人文地理学が扱う空間的な場所だけではなく、集合的記憶が根ざす何ものかをさす。人文地理学という場所を記憶の場とみることによって、場所の構築がアイデンティティの問題であることがより強調され、場所が記憶と相互依存の関係にあることが含意されるといえるだろう。以下ではホイアンのような空間スケールの記憶の場を「地理的記憶の場」と呼び、考察を加えていくことにする。

ホイアンを相対化するために、近代日本の旧植民地や勢力圏における特定の場所の表象を扱った地理的記憶の場研究を概観してみよう。旧植民地と満州についてみると、神田は台北や台湾の国立公園がいかに表象されたか考察し⁷⁾、駒込は台湾における教育の聖地とされた芝山巖について戦後まで含めたスパンで論じている⁸⁾。太田は朝鮮総督府期の倭城の顕彰を論じ⁹⁾、荒山はツーリズムを事例に

旧満州の戦跡に関する表象を論じた¹⁰⁾。南洋群島に転じると、千住はサイパンあるいは南洋群島全体に対する表象を論じている¹¹⁾。東南アジアについてみると、当時の日本におけるアンコール遺跡観を明らかにした藤原の研究がある¹²⁾。

こうした既往研究からは、次の2点を確認しておきたい。まず1つ目は、地理的記憶の場の解明により、近代日本の対外進出を批判的にとらえる姿勢が共有されていることである。例えば、上述の荒山は戦前の日本人の旅順観光について、観光のまなざしがナショナリズムの枠組の強化と忘却に寄与したことを指摘している¹³⁾。また藤原は、戦中の日本のアンコール関与を「植民地主義プロパガンダ」¹⁴⁾と断じた。神田はグレゴリー¹⁵⁾をもとに、こうした「他なる場所（人々、景観、文化、「自然」）の表象」を「心象地理」として批判的に論じている¹⁶⁾。

2点目に、日本の旧植民地や勢力圏、とりわけ東南アジアに対する日本の進出を地理的記憶の場の表象から解明していく研究は少ない。南方全体やタイ、フィリピンといったある1か国全体に対する表象を扱う研究はあるが¹⁷⁾、空間スケールが大きすぎて地理的記憶の場が扱われているとはいいがたい。また、戦時中の従軍作家などの文学者とその作品群における表象を扱う研究は数多いが¹⁸⁾、地理的記憶の場が主題として論じられているわけではない。ホイアンは位置するベトナムを対象に日本にとっての地理的記憶の場を扱ったものとしては、管見の限り、加藤によるごく簡単な言及¹⁹⁾があるのみである。

(2) 研究方法

ホイアンは1887年以降フランス領インドシナの一部であり、公式には1883年にフランス保護国になったアンナン（安南）国クアンナム（廣南）省の省都であった。なお、1941年7月の日本軍による南部仏印進駐によって、

ホイアンは日本の占領下に入っている。

少なくとも日本の占領以前にホイアンに定住する日本人の記録はない。フランス領インドシナはフランス人以外の移民をほとんど受け入れず、『南洋案内』（1942年）によれば、「移民の入国従業に就いては仏領印度（ママ）総督の許可がまづ必要」で「その手続は査証よりも複雑困難」であった²⁰⁾。そのため、1928年10月1日現在の在留邦人数は、東南アジア全体で40,464人のうち234人に過ぎず、これは例えば同じ大陸部のイギリス領マレーの5,908人と比べても著しく少ない²¹⁾。それに伴い、日本人の経済的・社会的な影響力は小さかった。

近代日本の記憶の場としてのホイアンを解明するため²²⁾、本稿では近代の日本においてホイアンに関してどのような記述が行われていたか調査・検討した。具体的には、1868年から1945年までの間に日本で刊行された、ホイアンに言及した文献を可能な限り網羅的に収集した。収集に当たっては、国立国会図書館、京都大学文学研究科図書館、同経済学部図書室の蔵書を中心に、三重中京大学の研究グループによる目録²³⁾も参考にした。収集した文献のうち、「フェイフォ（フェフォ、ヘーフォなども含む）」というホイアンの旧地名を明記したもの112点を表1に示した。これらはホイアン関連文献の中核をなすものであるが、地名は明記せずとも実質的にホイアンについて述べた文献もあり、以下の検討ではそれらも適宜用いている。なお、文献の渉猟はむろん完全ではないが、ホイアンに関する記述の傾向は十分に把握できるものと考えている。

以下のⅡ章では、ホイアンに関する記述のうち、一次資料を中心とした記述、学術研究の文脈で行われてきた記述に限定し、日本におけるホイアンの研究史の詳細な検討を行う。ホイアン研究史は一定の学術的な関心を集めてきたものの、そこにつけ加えるべきこ

とは少なくない。そして、続くⅢ章で、研究史に関わる文献以外にも含め、近代日本におけるホイアンの記述にどのような特徴がみられ、それらはどう変化したか検討する。こうした検討を通じて、本稿は次の3点の解明を目指している。

その1つは、地理的記憶の場ホイアンをめぐる表象、すなわち心象地理の解明である。ホイアンという場所に近代の日本からどのような意味づけが行われ、どのように記憶されてきたか。過去の心象地理に着目することで、客観的な景観復原ではない歴史地理学的考察を志向している。2点目に、日本の南進、とりわけその表象戦略について、ホイアンの事例からその一端を説明したい。いいかえれば、ホイアンという記憶の場が近代日本に果たした役割の考察である。これは上記の心象地理の解明に比べ、より大きな空間スケールでの歴史地理学的考察といえる。そして、日本ーホイアン関係に関するこうした検討の上に、3点目として、いささかなりとも記憶の場に共通する知見を示したいと思う。

Ⅱ. ホイアン研究史の検討

(1) 『世界旅行名所図会』への登場

本章ではホイアンをめぐる一次資料・学術的文献を詳細に検討する。まずはホイアンという地名が知られないままに行われた記述からみて行きたい。

ホイアン関連の記述を含む最も初期の出版物は、これまで研究史で取り上げられていない『世界旅行名所図会』（1886年）である。この本は大阪の総合出版社、青木嵩山堂（青木恒三郎）によるもので、世界周遊旅行記の形式をとった地誌書である。その「安南国之部」では、角屋家当主七郎次郎氏の肖像が掲げられ、「三重県下伊勢国松阪駅の白粉町角屋七郎次郎氏の祖先が全く安南に開航したる事実」が語られている²⁴⁾。同書では角屋家の取材結果を別の本で詳述すると示され、続いて

表1 ホイアン関連文献

高楠順次郎『仏領印度支那地誌』（南條文雄・高楠順次郎『仏領印度支那——一名仏国日南の新領土』文明堂, 1903), 19-39頁。	福中又次『泰國・仏印と日本人』婦女界社, 1941。
小島昌憲『安南国の日本人町とその墳墓』歴史地理26-1, 1915, 50-56頁。	村本達郎『大東亜戦争の地政学的性格』地理学10-6, 1941, 886-891頁。
辻善之助『南洋の日本町』学生6-1, 1915, 62-68頁。	松本悟朗『南方共栄圏読本』新興文社, 1941。
川島元治郎『徳川初期の海外貿易家』大阪朝日新聞社, 1916。	松本信広『仏印の民族と文化』（金子鷹之助『甞生仏領印度支那の全貌（大東亜共栄圏叢書第1編）』愛国新聞社出版部, 1941）37-67頁。
ベリ, ノエル『日本町の新研究（一）』学生7-1, 1916, 96-101頁。	松本信広『仏領印度支那と日本の関係』（山口高等商業学校東亜経済研究会編『東亜共栄圏の建設問題』生活社, 1941), 181-207頁。
越村長次『南洋渡航須知』南洋協会台湾支部, 1919。	室賀信夫『印度支那一佛印・タイ・ビルマ・英領マレー（世界地理政治大系3）』白揚社, 1941。
西村真次『江戸時代創始期（国民の日本史第九編）』早稲田大学出版部, 1922。	朝日新聞社『南方圖要覧』朝日新聞社, 1942。
瀬川 亀『我が朱印船の安南通商に就て』大阪外国語学校海外視察録1, 1923, 1-27頁。	井出浅亀『仏印ものがたり』皇国青年教育協会, 1942。
無署名『江戸時代初期海外発展の堺商人の史蹟』歴史教育1-5, 1927, 巻頭。	岩生成一『仏領印度支那に於ける日本人発展の歴史』（満鉄東亜経済調査局「新亜細亜」編輯部編『南方亞細亜の民族と社会』大和書局, 1942), 55-71頁。
岩生成一『南洋に於ける日本関係史料調査報告』歴史地理52-1, 1928, 83-85頁。	景山哲夫『南方建設の根本政策』明善社, 1942。
黑板勝美『南洋に於ける日本関係資料遺蹟に就きて』（啓明会『啓明会第二十七回講演集』啓明会, 1928), 3-38頁。	木宮泰彦『日本民族と海洋思想』刀江書房, 1942。
黑板勝美『安南普陀山雲中仏の碑について』史学雑誌40-1, 1929, 103-108頁。	クラエス, J.E.『仏印空の旅』（国際文化振興會編『Connaissance de L'Indochine印度支那』日佛印親善協會, 1942), 6-29頁。
桜井祐吉『安南貿易家角屋七郎兵衛附松本一族』角屋七郎兵衛贈位報告祭協賛会, 1929。	国史絵画会編『東京府養正館国史壁面集解説』国史絵画会, 1942。
台湾總督官房調査課編『南洋年鑑昭和4年版』南洋協会台湾支部, 1929。	佐藤 弘編『南方共栄圏の全貌』旺文社, 1942。
徴古館農業館『贈位先賢遺品目録並講演要領』徴古館農業館, 1929。	幣原 坦『南洋日本町の概観』・岩村成充『仏印に於ける日本町』, 歴史日本1-3, 1942, 6-14頁・15-23頁。
仲摩照久編『世界地理風俗大系第4巻』新光社, 1929。	柴田賢一『南方発展の知識』青年書房, 1942。
無署名『安南の史的記念物に指定された邦人の墓』大阪毎日新聞1929年7月31日。	芹川信久『大東亜共栄圏読本—仏印の話』西台塾出版部, 1942。
堺市『堺市史第2巻本編第2』堺市, 1930。	高須芳次郎『八幡船と朱印船』, 実業之日本45-18, 1942, 34-36頁。
柴謙太郎『角屋七郎兵衛の事蹟は何を語る（上）—所謂鎖国の裏面』歴史地理56-4, 1930, 249-265頁。	田中久夫『安南記』, 国民精神文化8-7, 1942, 679-715頁。
杉田祥夫『大南洋へ』大倉弘文堂, 1931。	徳田貞一『仏印の日本橋』, 読売新聞1942年10月17日。
日本地理大系編集部編『日本地理大系海外発展地篇下巻』改造社, 1931。	中田千畝『南方外交史話』日本國際協會, 1942。
台湾總督官房調査課編『南洋年鑑第2 回版』南洋協会台湾支部, 1932。	長沼依山『南支仏印風土記（少国民版）』至玄社, 1942。
松本信広『仏領印度支那印象記（三）』三田評論445, 1934, 10-16頁。	縄田正造『南方圏の展開』明治図書, 1942。
岩生成一『南洋日本町の盛衰（一）』台北帝国大学文政学部史学科研究年報2, 1935, 15-139頁。	南進青年会編『大南洋を拓く—南進青年の手引』, 拓南社, 1942。
高須芳次郎『近世海外に於ける日本人町』海を越えて2-5, 1939, 50-54頁。	南洋協会『大南洋図』中央公論社, 1942。
板澤武雄『昔の南洋と日本（ラジオ新書24）』日本放送出版協会, 1940。	南洋協会編『南洋の全貌』湯川弘文社, 1942。
岩生成一『仏領印度支那に於ける日本人発展の歴史』新亜細亜2-9, 1940, 92-101頁。	南洋協会編『南洋案内』南洋協会, 1942。
金永健『安南沱瀾の日本町』史学19-2, 1940, 47-71頁。	南洋団体連合会編『大南洋』日本青年協会出版部, 1942。
悟棲生『印度支那の“松本寺”—南方における邦人活躍の偉跡』南方2-11, 1940, 57-63頁。	南洋団体連合会編『大南洋年鑑』南洋団体連合会, 1942。
高木 卓『南海譚』文芸8-12, 1940, 86-106頁。	西村真次『角屋七郎兵衛（後編）』, 歴史日本1-4, 1942, 147-175頁。
武見芳二『仏領印度支那』（石田龍次郎編『外南洋Ⅱ（世界地理第7巻）』河出書房, 1940), 61-164頁。	西村真次『日本海外発展史』東京堂, 1942。
田沢丈夫『仏印事情』羽田書店, 1940。	西村真次『大東亜共栄圏』博文館, 1942。
台湾總督府交通局鉄道部『仏領印度支那の交通』台湾總督府交通局鉄道部, 1940。	日本歴史研究会編『大東亜共栄圏南方大観 附世界新秩序建設戦』日本歴史研究会, 1942。
日本印度支那協会編『仏領印度支那概観』日本印度支那協会, 1940。	早川順平『南方圖早わかり』宝雲舎, 1942。
藤田元春『かどやしちろうえ』(富山房国史辞典編集部編『国史辞典二巻』富山房, 1940), 589頁。	本庄栄次郎『先覚者の南方経営』日本放送出版協会, 1942。
永田安吉『我国と安南の関係』新亜細亜2-8, 1940, 38-58頁。	松川二郎『大東亜地政学』霞ヶ関書房, 1942。
松尾樹明『仏印と角屋七郎佐衛門（下）』, 南洋26-9, 1940, 47-52頁。	水谷乙吉『安南の歴史』育生社弘道閣, 1942。
安東収一『仏印—絵と文』大日本出版, 1941。	水谷乙吉『仏印三十年記』育英書院, 1942。
井上雅二『南進の心構へ』刀江書院, 1941。	水谷乙吉『仏印の生態』岡倉書房, 1942。
岩村成充『安南通史』富山房, 1941。	水谷乙吉『安南の民俗』育生社弘道閣, 1942。
金子辰太郎『仏印は招く』海を越えて4-4, 1941, 3-13頁。	水谷乙吉『仏印案内』目黒書店, 1942。
菊池 寛『海外に雄飛した人々(新日本少年少女文庫)』新潮社, 1941。	山田毅一『大南洋の全貌』弘道閣, 1942。
日下頼尚『邦人を待つ仏印の宝庫』文明社, 1941。	山本熊太郎『概観東亜地理』柊谷書院, 1942。
国松久弥『新南洋地誌』古今書院, 1941。	無署名『戦線に偲ぶ南進日本の失兵／武装した先覚者の群／勇名各地に轟く』, 朝日新聞1942年5月20日。
柴田賢一『図南太平記—八幡船から鎖国令まで』実業之日本45-7, 1941, 42-46頁。	アガール, アドルフ著, 宮島 綱男・土居 博訳『仏領印度支那』修文館, 1943 (原著1935)。
台湾南方協会編『南方読本』三省堂, 1941。	国松久弥『東亜共栄圏の地理』柊谷書院, 1943。
坪田譲治『南洋の日本町』朝日新聞1941年1月26日。	佐藤秀男『南方の歴史』清水書房, 1943。
伝記学会編『南進日本の先駆者たち』六甲書房, 1941。	南方年鑑刊行会編『南方年鑑昭和18年版』東邦社, 1943。
中野 実『仏印縦走記』講談社, 1941。	南洋団体連合会編『大南洋年鑑2』南洋団体連合会, 1943。
南方産業調査会編『仏領印度支那(南進叢書3)』南進社, 1941。	島中敏郎『仏印風物史』生活社, 1943。
南方問題研究所『南方問題と国民の覚悟』南方問題研究所, 1941。	広瀬浄慧『大東亜経国誌』日本出版社, 1943。
日本拓殖協会編『仏領印度支那(拓殖叢書第1篇)』日本拓殖協会, 1941。	藤原利一郎『仏印紀行の一節—エよりツーラン, フェフォへ』東洋史研究8-3, 1943, 40-48頁。
	淵野 修『南方建設と仏領印度支那』（東亜調査会編『南方報告』毎日新聞社, 1943), 49-86頁。
	舟越康寿『東南アジア文化圏史』三省堂, 1943。
	舟越康寿『南方文化圏と植民教育』第一出版協会, 1943。
	村上莞爾『日本人の海外発展（大東亜少国民文庫）』田中栄堂, 1943。
	岩生成一『近世に於ける日本民族の南方発展』（三省堂編『南方文化講座—日本南方発展史篇』, 三省堂, 1944), 153-266頁。
	荻須 高德『仏印—大東亜戦争画文集』新太陽社, 1944。
	小野俊一『改訂大東亜ものがたり（日本少国民文庫）』新潮社, 1944。
	佐々木恭一・山崎富伝編『精密世界地図帖—南方共栄圏篇』国際地学協会, 1944, 4
	高木 卓『安南ものがたり』東京出版, 1945。

注：ホイアンの旧地名（フェイフォ、ただしフェフォ、ヘーフォなども含む）を明記した邦語文献を出版年順（1868-1945）に示した。再版、改版、は含まず（ただし大幅な改稿は除く）、雑誌も1冊子で1文献としてあげてある。なお文部省著作教科書は含めていない。

出版されたその『日本之光輝』(1887年)²⁵⁾で、ホイアンという地名こそないものの、交趾の日本町について、またその中心人物として目されていくことになる角屋七郎兵衛について詳しい紹介が行われた。近世伊勢の地誌書で角屋はすでに紹介されているが²⁶⁾、それが全国向け出版物の中に登場したという点が重要である。さらに、この『日本之光輝』での紹介は、その後、影響力のある出版物に引用されたという点でも注目される。代表的なものに『帝国実業家立志編』²⁷⁾、『世界ニ於ケル日本人』²⁸⁾、『大日本商業史』²⁹⁾があり、その後のホイアンや角屋の評価に大きな影響を与えたと考えられる。

ホイアンに関わる初期の記述の中心人物、角屋七郎兵衛についてみておきたい。角屋家は松阪を拠点とする朱印船貿易家で、当主は七郎次郎を名乗った。七郎兵衛(1610-72)はその一族で諱名を栄吉という人物であり、いわゆる鎖国令によって安南から帰国できずに客死した。大正以降、特に昭和に入ってから七郎兵衛が有名になったのは、彼が故郷とたびたびやり取りした手紙類が残され、それらが角屋文書としてまとめられていたことによる。

角屋家と角屋七郎兵衛に対しては、その後、中央の研究者によって学術的な関心が向けられていく。1896年には帝大史料編纂掛の小中村(池辺)と佐藤が角屋家で史料調査を行った³⁰⁾。1901年に同じく調査に赴いた東京帝大講師の内田は、角屋家の史料について「是れは既に就て観たる人士も二三にして止まらず」と語っている³¹⁾。また、研究者ではないものの、学習院学生の松木が1897年に角屋七郎兵衛を紹介しており³²⁾、1904年には東京帝大史学科出身の柴がやはり角屋家所蔵の海図を紹介している³³⁾。

(2) ホイアン認知以後

ホイアン、フェイフォという地名に言及し

た最初の文献は、管見の限り、仏教学者で東京帝大教授の高楠による「仏領印度支那地誌」(1903年)である³⁴⁾。高楠は近世漂流民に関する一連の記述の中で、「フワイホ市 支那通商の首港なり」と述べている³⁵⁾。ただし、高楠は同じ論文の中で近世の記録にある地名「會安」(ホイアン)に言及しており、近世のホイアンと近代の「フワイホ」(フェイフォ)が同一であることに気づいていなかった。

ホイアン関連の最初のまとまった記述として従来から指摘されてきたのが川島による研究である。川島は京都帝大在学中に大阪朝日新聞1万号記念懸賞論文に応募し、1等に当選した「徳川初期の海外貿易家」を大阪朝日新聞に連載した(1911年1月～2月)。その後、連載に加筆修正した著書を2度にわたって出版している(1916年、1921年)³⁶⁾。新聞連載当時は、角屋七郎次郎を紹介しつつも³⁷⁾、角屋が渡航した日本町がどこか、すなわちホイアンについては言及がなかったが、単行本刊行時にホイアンに関する記述が追加されている。

ホイアン日本町の最初の指摘は東京帝大助教授・史料編纂官の辻によってなされた。辻は青少年向け雑誌『学生』に書いた「南洋の日本町」(1915年)の中でホイアンの日本橋を紹介し、「参謀本部の井上少佐が調査」したことを紹介している³⁸⁾。その中では角屋に言及しているが、本拠地を白子と誤るほか、渡航地についてはダナン(当時の呼称はツーラン)かホイアンのどちらかとしている。また、辻は同じ文章の中で「茶屋新六交趾貿易渡海図」(後述)に初めて言及している点も注目される。

なお、辻によるホイアン研究にはフランス人研究者ペリの協力が大きかった可能性があり、ペリの追悼論文の中では「日本町の研究に就ては辻博士とペリー師が協同した所があるらしい」と指摘されている³⁹⁾。ペリは宣教

師として1889年に来日し、後にハノイのフランス極東学院職員として日本研究に従事した。辻の文章にはペリとの交友がうかがえ、ペリは辻の上記文章への応答というべき文章を同じ『学生』誌上に書いている⁴⁰⁾。「茶屋新六交趾貿易渡海図」は辻が上記の文章で「新しい材料」として紹介するよりも前にペリが模写しており⁴¹⁾、ペリが辻にこの絵巻の存在を教えた可能性もある。また上述の川島も、1915年にペリと会ったのちにこの絵巻に初めて言及している（1916年）⁴²⁾。

(3) 研究の進展

ホイアン研究の進展を現地調査からみておきたい。研究に影響を与えた最初の訪問者は、従来指摘されていないが、井上一次陸軍歩兵少佐であると推測される。上述の辻によって、ホイアン日本橋の碑文を調査し拓本を採取したと紹介されている「参謀本部の井上少佐」のことで、井上は1906～07年に参謀本部からシンガポールに派遣されている⁴³⁾。オランダ領東インドやマレー半島を調査した記録は残っており、フランス領インドシナを往路か復路に調査したものと推測される。

自身で記録を残した最初の訪問者は、1909年の小島（早稲田大学）⁴⁴⁾である。それ以降は従来から知られているように、1922年の瀬川（大阪外国語学校）⁴⁵⁾、1927年の黒板・岩生（東京帝大）⁴⁶⁾と、研究者がしばしば訪問するようになる。

そうした研究の進展の上に、ホイアンを含む東南アジアの日本町研究の戦前における到達点を示すのが岩生の研究（1935年）⁴⁷⁾である。岩生は上述の現地調査、ジャカルタやオランダ本国での史料収集ののち、台北帝大南洋史講座助教授として研究を進め、海外史料を駆使した研究成果を世に問うている。ホイアンに限定するならば、岩生の研究は、角屋文書を利用し一定の評価を与えたこと、ホイアンを角屋の渡航地であり交趾における主要

な日本町所在地と認めたうえで、「茶屋新六交趾貿易渡海図」に描かれた日本町をダナンと断定し定説化したこと⁴⁸⁾を指摘できよう。角屋文書と角屋七郎兵衛の働きを重視するそれまでの研究動向は岩生に至ってより強化されたといえる。

戦前にはホイアン研究において等閑視された「茶屋新六交趾貿易渡海図」についても触れておきたい。この絵巻は近世初期の豪商、茶屋家の尾張分家による朱印船航海を描いたとされる⁴⁹⁾。この絵巻に描かれた日本町は戦前にはダナンであるとみなされていたが、近年になってホイアンであると考えられるようになった⁵⁰⁾。内田⁵¹⁾はこの絵巻が断簡の集成であることを指摘し、この絵巻の史料批判がこれまで行われてこなかったと述べている。しかし、管見の限り、この絵巻については、戦中期にすでに穴田、大阪府立図書館によって断簡であるとの指摘や史料批判的な検討が行われている⁵²⁾。さらに、この絵巻はホイアンを含む東南アジアの日本町の一般における理解に大きな役割を果たしたことも指摘しなければならない。この絵巻の日本町の部分は昭和初期から高等小学校の国定教科書『高等科国史』の挿絵に用いられた⁵³⁾。また、東京府が青少年修養施設の養正館に展示するために制作した「国史絵画」の中には、この絵巻をモデルにダナン日本町を描いた「日本人の海外発展」（高村眞夫筆）が含まれていた⁵⁴⁾。

本章ではホイアンの研究史について、従来知られていなかった文献の紹介を含め、いくつか指摘を行ってきた。主な点は、まず、近代におけるホイアン関連の記述は従来からの指摘よりも古く、ホイアンという場所を特定しないまま進められてきたということである。本稿ではホイアン関連で最古の文献『世界旅行万国名所図絵』と、フェイフォという近代期のホイアンの地名を初めて用いた文献「仏領印度支那地誌」を提示することができ

た。次に、こうした研究が角屋文書と七郎兵衛中心で進められてきたことを指摘した。このことは特におかしなことは思われないかもしれないが、角屋はヨーロッパ側の文献に全く登場しないこと、そのためであろう、近年の朱印船貿易研究者にはホイアンを論じても角屋に全く言及しない例⁵⁵⁾もあることをつけ加えておきたい。今日からみれば日本からの視点に特化した研究であったとえよう。以上の2点は、とりまなおさず、ホイアンの心象地理のありようを示すものである。このほか本章では「茶屋新六交趾貿易渡海図」の日本町研究における位置づけなどについても指摘した。

次章ではより広く、研究史に限定せずにホイアンがいかに記述されたかみていきたい。本章で扱った研究史がおおむね1935年以前に収まっているのに対し、一般向けの出版物、すなわち二次資料におけるホイアンへの言及はそれ以降に増えてゆく。それらはホイアンについて広く存在した関心を物語るとともに、研究史について観察された心象地理の特質をよりあらわに示すことになる。

Ⅲ. ホイアンの心象地理

(1) 南進論とホイアン

本章では、近代日本におけるホイアンに関する記述を、二次資料を中心に検討する。まず本節では、ホイアンに関する記述の動向が南進論と関わっていることを示す。

矢野は、戦前の各種論考にみられる「南洋を日本の利益圏としてとらえ、南洋への進出

を正当化する外交イデオロギー」を南進論と定義している⁵⁶⁾。矢野によれば、戦前には南進論の高まりが明治10年代末～20年代初め(1885頃～1890頃)、明治末～大正初期(1910頃～1917頃)、昭和10年代(1936年・40年の南進の国策化⁵⁷⁾以降)の3回あったという⁵⁸⁾。その時代区分に従い、表2に、ホイアンに関する記述のある文献と、南方書、つまり近代において南方と呼ばれた今日の東南アジア、オセアニア、南アジアについて書かれた文献のそれぞれについて数を示した⁵⁹⁾。双方とも完全なものではないし、ホイアン関連文献の方は単行本、雑誌論文・記事の別を問うていないから、正確な比較はできない。しかし、およそその傾向として、両者が徐々に増加し、南進の国策化以降にさらに増加という似た変化をしていることは読み取れよう。これら南方書、そしてホイアン関連文献の多くは、南進論を声高に叫ぶものではない。しかしながら時代背景としての南進論的なものをかすかに、あるいは濃厚に漂わせている。

矢野による時期区分にしたがって、各種文献のホイアン関連記述をみていくと、まず明治10年代末～20年代初めの時期には、前章でみたとおり『世界旅行万国名所図絵』や『日本之光輝』が刊行され、ホイアン関連の記述が初めて世に現れている。次の明治末～大正初期は、矢野によれば外南洋(東南アジア)への膨張主義的な注目の特徴づけられ⁶⁰⁾、それはホイアン研究にも色濃く反映されている。すなわち、川島の研究「徳川初期の海外貿易家」は大阪朝日新聞がこの題目に限定し

表2 ホイアン関連文献数と南方書数の比較

	明治期 (～1912年)	大正期 (1913～1926年)	1927～35年	1936～41年	1942～45年
ホイアン関連文献	1	7	16	33	55
南方書	34	181	226	334	—

注：「ホイアン関連文献」の定義は表1の注参照。

て募集した懸賞論文の応募作であり⁶¹⁾、このテーマが当時重要度の高いものとして認識されていたことがわかる。また、この時期に辻や小島、ペリの論考も刊行されており⁶²⁾、ホイアンに言及した初の渡航案内（『南洋渡航須知』⁶³⁾）も出ている。

その後の1927～35年を矢野は南進論不毛期としているが⁶⁴⁾、ホイアンはこの時期に研究の進展をみており当てはまらない⁶⁵⁾。昭和10年代（1936年以降）の3度目の南進論の高まりは、ホイアンについては若干のタイムラグがあるが、1940年以降の急増となって現れている。

このように、ホイアンに関する記述は南進論と平行して進められてきたといえる。前章でみたホイアン研究はその最初から南進論の影響を受けていたとみなければならない。また、昭和10年代（1936年以降）のホイアン関連記述の急増についても、大枠では南進論の高まりから説明できる。しかし、矢野が「人為的な『南進ブーム』」と表現する⁶⁶⁾この時期のホイアン関連文献についてはその内実をもう少し詳しくみておく必要がある。

このため、以下では、主として1936年以降のホイアンに関する記述を、ホイアンの中心人物として記述された角屋七郎兵衛に対する評価と、ホイアンと日本との関係の意味づけという2つの視角から検討していく。その際、南進論の高まる1936年ごろを境に、この2つに関する記述が変化したことを示したい。2つの視角に絞るのは、これらが現地を知らないまま、日本で一方的に生産された大量のホイアン記述に特徴的であり、当時の日本のホイアンに対する関心の大半を占めると考えられること、またこれらが日本におけるホイアン心象地理の形成にとって重要であると考えられることによる。

(2) 角屋七郎兵衛の評価

前章では、近代におけるホイアン研究がホ

イアンという場所を特定しないまま、角屋文書や角屋七郎兵衛を軸に始まったことを指摘した。ここでは、角屋の地元、伊勢における角屋家や角屋七郎兵衛の顕彰は、より古く、また幅広く行われており⁶⁷⁾、ホイアン研究にはその流れを受け継いだ面があることをみていく。

伊勢においては角屋家自身の積極的な先祖顕彰、家名再興の動きがまず存在した。角屋家の当主は1877年に先祖の初代七郎次郎を歌舞伎の題材とするよう歌舞伎役者の市川團十郎に要望に東京まで出かけ、それを実現させている⁶⁸⁾。また、前述の『世界旅行万国名所図絵』には、角屋家が朱印状や航海図などの各種家宝を邸内東照宮の公開に合わせて展示しており、それを参観した読者からの報告をもとに角屋家へ取材に赴いたことが記されている⁶⁹⁾。この取材に応じたことをきっかけに、角屋家当主が序文を寄稿した『日本之光輝』が刊行され、角屋七郎兵衛は多くの書物で紹介されるに至った。

その後、地元伊勢において角屋七郎兵衛の顕彰が進んでいく。前章でみた、1897年という早い時期に角屋七郎兵衛を紹介した松木は伊勢の出身⁷⁰⁾である。1911年には後に著名な郷土史家となる大西が『三重縣史談會々誌』上で「我が縣民の天下に向て大に誇るに足る処にして縣史上に特筆大書すべき事実」として角屋七郎兵衛に言及し⁷¹⁾、大正大札記念に三重県が出版した『先賢遺芳』⁷²⁾に角屋七郎兵衛は郷土の偉人として取り上げられた。ただし、1910年の松阪第一尋常高等小学校による『郷土人物事蹟調査』⁷³⁾には七郎兵衛はあげられておらず、その時点では価値が確定していなかったことがわかる。

顕彰を決定づけたと考えられるのが、1928年の昭和大礼に際しての七郎兵衛への従五位贈位である。これを受けて、翌年、神宮徴古館農業館で七郎兵衛を含む地元贈位者を顕彰する展覧会と講演会が開かれ⁷⁴⁾、松阪でも七

郎兵衛に関する書物が刊行された⁷⁵⁾。ただし、当時の新聞報道⁷⁶⁾をみる限り、地元では必ずしも贈位が期待されていたわけではなかったようである。

こうした角屋七郎兵衛の顕彰は、ただ地元の熱意によるものではなく、中央からの評価とあいまって進んだとみる必要がある。前章でみたように、1896年以降、帝大を含む中央の研究者が角屋を相次いで訪れており、角屋文書、角屋七郎兵衛への高い関心は明らかである。その延長に、東京帝大における明治天皇の角屋朱印船旗の観覧(1905年)も実現している⁷⁷⁾。こうした権威ある外部からの評価は、地元伊勢における評価に影響したと考えられる。また、伊勢神宮徴古館に角屋文書が明治末(おそらく1909年)に寄託されたこと⁷⁸⁾も、角屋七郎兵衛の価値を高めたであろう。

興味深いことに、角屋七郎兵衛の顕彰は、伊勢とは独立して長野県松本でも行われている。七郎兵衛が遠く松本で注目されたのは、角屋家が元来は松本出身で、本姓を松本と称したことによるものである。管見の限り、松本では1902年の『松本平郷土誌 児童用』をはじめ3点の郷土教育関係の刊行物と「松本郷土歌留多」(1934年)で、七郎兵衛が「松本七郎兵衛」として取り上げられている。そのうち『松本郷土訓話集第1輯』には「松本七郎兵衛栄吉海国男子の本領を発揮す」と題された章に、「此の一快男子を山岳重畳たる我が郷に出す。豈に我が郷の面目にあなすや」とある⁷⁹⁾。伊勢と同様に、七郎兵衛が中央につながる郷土の英雄として位置づけられていることがわかる。

さて、ここまでみてきたのは、1935年以前の主として伊勢、松本における郷土誌の記述であった。これらの記述では、七郎兵衛は最初から日本史の枠組で郷土の偉人、英雄としてとらえられているといつてよい。むろん、中には例えば松本のように露骨な膨張主義をもって七郎兵衛を評価する論者もいる。しか

し、決して何らかの政治的、軍事的行動と結びつけられていない点は、後の記述と異なる点である。

一方、伊勢、松本の郷土誌以外の1935年以前の記述には、そもそも七郎兵衛について明確な評価をするものが少ない。それでも、例えば『日本之光輝』、『日本百傑』⁸⁰⁾といった七郎兵衛を扱った本の書名や、「強勢の大殖民地を開きし」(『世界旅行万国名所図絵』⁸¹⁾、「日本人のために万丈の気を吐いた俊傑」(『世界地理風俗大系』⁸²⁾)といった記述には、時に膨張主義的な、日本史上の英雄としての七郎兵衛像が明確に現れているといえる。

その後、七郎兵衛の記述は、徐々に大東亜共栄圏へと、すなわち現実の政治へと結びつけられていく。確認できる最も早い例が、1938年の山田(松阪商業学校教諭)による『人文的に観た城下町松阪』で、角屋七郎兵衛について「彼の安南に建設した日本人町は、小規模ではあるが将来の植民地として発展せしめ、日本人雄飛の本拠地たらしめんと、遠大な計画をさへ樹立してゐたのであつた」と述べられているものである⁸³⁾。過去の七郎兵衛、あるいはホイアン日本町を南進の文脈に強引に読み込むものであり、郷土誌にこうした先鋭な言説が初めて現れたことに注意したい。同様の七郎兵衛に関連する記述は、「先駆同胞の英霊は南方の地下に鎮まり、燃ゆるが如き南進の雄図を椰子薫る空に描いて後続部隊を招いてゐる」(『仏領印度支那』⁸⁴⁾、「戦線に偲ぶ南進日本の尖兵／武装した先覚者の群／勇名各地に轟く」(『朝日新聞』)⁸⁵⁾などいくつか確認でき、七郎兵衛を指して「南進先駆者」という表現も多数みられる。1935年以前のある意味で素朴な英雄から南進の先駆者へと、七郎兵衛の評価が変化しているのである。

また、これらの中には山田長政と並ぶ位置づけがみられることは興味深い⁸⁶⁾。早い時期⁸⁷⁾から七郎兵衛は山田長政になぞらえら

れているが、その後、長政とともに南進の文脈で語られ始める。矢野は「過去の歴史の美化＝ロマン化の必要に迫られたあげく、高岳親王や山田長政など、いくにんかの『南進』日本人を発掘して、スターとして祭り上げる」ことが1936年以降に起こったと述べている⁸⁸⁾。七郎兵衛はまさにそれら『『南進』日本人』の一人であり、ホイアン⁹⁰⁾の山田長政、伊勢の山田長政として創出されたのである。

角屋七郎兵衛はまた、小説や子ども向けの書物でも取り上げられている。これらはいずれも1936年以降の出版であり、南進先駆者としてより純化され、「美化＝ロマン化」された七郎兵衛像がそこには示されている。すなわち、歴史小説家の高木は七郎兵衛を主人公にした短編「南海譚」、同じく少年向けの「安南ものがたり」を書いている⁸⁹⁾。また、七郎兵衛を扱った小説以外の子ども向け出版物は6点あり⁹⁰⁾、その中には七郎兵衛を主人公にした絵本⁹¹⁾もあれば、七郎兵衛らについて「…我等の祖先は地下で喜んでゐることです。…われわれはこの精神を受けついで、益々海外に発展しなければなりません」⁹²⁾といった記述もみえる。

なお、ホイアンに渡航した貿易商人で一般に言及される人物として、七郎兵衛以外に先述の茶屋や具足屋がいる。具足屋はホイアンに墓が残り、昭和初期にその子孫が判明したことによって⁹³⁾、地元の堺では大いに注目を集める存在であった⁹⁴⁾。場合によっては、七郎兵衛と並ぶホイアンの『『南進』日本人』として全国的に取り上げられる可能性もあったことを指摘しておきたい。

(3) ホイアン・日本関係の意味づけ

ここまでみてきた角屋七郎兵衛の評価は、ホイアンを日本との関係からどう意味づけるかという問題と強く関わっている。しかし、七郎兵衛への言及に比べ、ホイアンという場所そのものへの言及は決して多くない。華僑

の町であることはほとんど示されず、関心は日本との関係にほぼ限定されており、それも、日本橋や日本人の墓があるといった以上の記述は少ない。1930年代になっても、「フェイフォ」などの地名を用いず、「交趾」や「安南」という広域地名でしかホイアンを示さないような文献が散見される。現地への無関心、日本を論じる道具としてホイアンを扱う姿勢が指摘されよう。また、ホイアンが七郎兵衛の渡航先として知られるのは前章でみたように1915年のことで、ホイアンの記述の開始自体が七郎兵衛の記述に比べると遅い。ただそれでも、七郎兵衛の記述同様に記述の変化を確認できる。

まず、初期にあつては、事例は少ないものの、ホイアンを日本にとって心情的に特別な場所として表現するものが目立つ。例えば、「吾邦にとり忘るべからざる歴史を有する地」(『南洋渡航須知』)⁹⁵⁾、「邦人に取ってこの上もないなつかしい土地」(『世界地理風俗大系』)⁹⁶⁾という記述で、日本とホイアンの歴史的な関係が強調されている。また、『南洋年鑑』における「多恨の遊士の一度は訪れて往昔遙々雄図を懐いて渡航して居た邦人の遺蹟を葬ふべきである」という記述⁹⁷⁾では、ホイアンはあたかも巡礼地として位置づけられていることがわかる。

こうしたホイアン・日本関係の描写は、角屋七郎兵衛の場合と同様、南進と「大東亜共栄圏」の枠にはめられるようになる。いいかえれば、ホイアンは大東亜共栄圏の理念を具現した場所、南進と「大東亜共栄圏」を正当化する資源としての場所に変質していく。

そのような記述の嚆矢は、前節でもみた『人文的に観た城下町松阪』(1938年)であり、そこではホイアン日本町は「将来の植民地」・「日本人雄飛の本拠地」として描かれている⁹⁸⁾。その後のホイアン・日本関係の記述には、「骨は東亜の天地いづれに埋めても結構だと思わん様なものは今の日本人たる資格

はない。仏印にだつて中部安南のヘーフホに日本人の墓が五六基もある。我々の血には祖先から南進にたぎる血潮を受けて居るのだ」(「仏印は招く」)⁹⁹⁾、「南暎の此の地にも、日本皇国の皇化を普く布かんとする遠大なるパイオニア・スピリットから江戸日本橋の名を移して安南の日本橋としたものであつたろう」(『南方外交史話』)¹⁰⁰⁾、「南方各地に日本町が勃興し、そこには自治が許され、民長があり、日本人の手で一種の南方共栄圏的世界が開かれた」(『南方の歴史』)¹⁰¹⁾などのように、過去の日本町から南進・「大東亜共栄圏」を正当化したり、過去の日本町に南進・「大東亜共栄圏」を投影したりするものが目立つ。

このようなホイアン日本町、あるいは日本町一般についての記述は、当時の地政学においても行われており、ここでそれらを概観したい。管見の限り、地政学で最初に日本町に触れたのはハウスホーファーである。彼は『太平洋地政学』において、ホイアンという地名こそ出さないが、「日本人区域—Japan-vietel 謂はゆるニホンマチ」に簡単に言及し、日本人を海洋民族として論じている¹⁰²⁾。しかし、ハウスホーファーを積極的に受け入れた日本地政学協会系の地政学者では、国松、佐藤がごく簡単にホイアンに言及するにとどまっている¹⁰³⁾。むしろ、ドイツ地政学と距離を置く¹⁰⁴⁾京都帝大系の日本地政学においてより積極的なホイアン日本町への論及がみられる。すなわち、村本は安南などの日本町について「大東亜戦争進行…実によく適合」と述べ¹⁰⁵⁾、室賀はホイアンなどについて、「これら先覚者の華々しい活動は深い感謝をもつて回想せられなければならぬ。それは一面に於いてまさしく近世史への日本の参与であり、他面飛躍的な発展を準備する為の日本の生命圏確保への試みだつたからである」と述べている¹⁰⁶⁾。日本地政学がホイアン日本町に論及するのは、より時局を重視する

現われなのだろう。しかし、そこにみられる論旨は上記の一般の文献と変わるところがなく、陳腐といわざるを得ない。このように、日本とホイアンとの関係、あるいは日本町について、日本地政学は時局に迎合したありきなどの議論しか提示し得なかったといえる。

(4) 現実への影響

本章ではホイアンの心象地理の特徴をみいだすため、1945年以前のホイアンに関する記述のある文献全体を検討し、まず初めに学術研究を含むホイアン関連の記述が南進論の流れに位置づけられることを確認した。その上で、角屋七郎兵衛の評価、ホイアン・日本関係の意味づけの2点から各種文献のホイアン関連記述を検討した。その結果、明治初期の角屋家の先祖顕彰が研究史につながっていること、また松本においても伊勢とは独立に七郎兵衛の顕彰が存在したことを明らかにした。そして、1936年を境に、ホイアンに関する記述が変化することを示した。すなわち、七郎兵衛は郷土の偉人としてではなく現実の政治と結びついた英雄へと仕立てられていき、ホイアンはただ日本(人)にとっての心情的に特別な場所ではなく、南進・「大東亜共栄圏」を正当化する場所として意味づけられるようになることが指摘できる。

そして、こうした日本におけるホイアンの表象は、現地にも影響を与えた。その1つは、日本人の墓3基の修復とフランス総督府記念物への指定である。上でもみたように、ホイアンにおける日本人の墓はごく初期から注目されており¹⁰⁷⁾、谷弥次郎兵衛、文賢具足、潘二郎の墓が確実に日本人のものと判断されていた。1927年に黒板、岩生がホイアン調査を行った際に、黒板によってこれら3基の墓の修復が提唱され、黒板やサイゴン、ハノイ、ハイフォンの日本人会の寄付により修復工事が行われるとともに、日本政府からの働きかけもあってフランス領インドシナの記念物と

しても指定を受けている(1928年)¹⁰⁸⁾。このうち、文賢具足の墓はベトナム戦争中に韓国軍によって破壊されたものの、近年になって再建されている。いずれも今日では観光資源としても位置づけられており、表象が記念物化をもたらし現実の景観に影響したといえる。

もうひとつが、現在のホイアンにおける日本の表象の氾濫である。拙稿¹⁰⁹⁾でも指摘したように、現在のホイアンでは日本が観光資源とみなされている。例えば、日本橋には「ホイアン」というカタカナと徳川と豊臣の家紋の描かれたランタンがつるされ、古い建築物のデザインや構造は日本由来として説明され、あるいはいくつかのホテルに日本スタイルの客室が設けられている。このように現在、日本が強く意識されていることに、多量のホイアン記述に誘われ多数の日本人が占領期にここを訪れたこと¹¹⁰⁾が影響していないと考えるのは不自然であろう。かつては「日本人の子孫」、「日本人が住んでいた(家)」といった言説もあったようである¹¹¹⁾。すなわち、これら2点は、日本近代のホイアンの心象地理がただ過去の一方的な表象なのではなく、現在の現実にも影響していること、その意味で現在のホイアンをみる上でも決して小さくない意義を有していることを示している。

IV. おわりに

本稿では、ベトナムの港町・ホイアンを近代日本にとっての記憶の場ととらえ、ホイアンに関する各種記述を読み解いてきた。ここまで論じてきたことを3点にまとめておきたい。

最初に、近代日本がホイアンをいかに表象したか、すなわちホイアンの心象地理としては、初期の「懐かしい」という意味づけ、そしてそれが変化した1936年以降の南進・「大東亜共栄圏」を正当化する材料としての意味づけが描出できる。また、この心象地理の形成と変化には、角屋七郎兵衛の特別視とその

見方の変化、すなわち、郷土の偉人から現実の政治と結びついた南進の英雄への変化がほぼ平行していることも明らかになった。さらに、こうしたホイアンの心象地理は、現在のホイアン現地にも影響している。

このようにホイアンの過去の心象地理を明らかにすることは、近代のホイアン・日本関係の忘却に抗うという意義を有すると考えられる。ホイアンは日本にとって、現在、観光でつながり深い土地であり、過去の関係についての知見は相互理解に不可欠である。本稿では触れられなかったが、ホイアンには日本軍による中国系住民の虐殺慰霊碑もある。過去のホイアン・日本関係を忘却することは両者の不健全な関係を示すものといわざるを得ない。

日本におけるホイアンの忘却は戦後長らく交流が途絶えたためと考えられよう。交流の長い途絶の後に、欧米人向けに観光化が一定程度進んだ段階、つまり日本橋など日本的なものや日本人町の記憶自体が観光資源となった段階でツーリストとして関わりを再開した¹¹²⁾ことが、日本におけるホイアンの忘却をいっそういびつなものにした。つまり、近代期の反省がないまま、再びホイアンは日本ゆかりの地として消費されているといえる。小森¹¹³⁾が「植民地的無意識」と論難するようなコロニアルな状況は、ホイアンの場合未だ解決していないといえるのではないか。

なお、本稿では戦前・戦中におけるホイアン研究がホイアンの心象地理形成の一翼を担ったこともあわせて確認した。すなわち、角屋家の先祖顕彰を受け継いで角屋七郎兵衛と角屋文書を軸とした紹介が始まり、それが研究の流れにも反映していること、研究が南進論と平行して進められてきたことなどを指摘した。松本において他から独立して七郎兵衛の顕彰が進められたことも、研究史には位置づけにくい、ホイアンの心象地理形成の

特筆すべき現われといえる。

2 点めに、日本の東南アジア進出の表象戦略については、矢野の示した、1936年以降における過去の「『南進』日本人の偶像化」が、ホイアンの角屋七郎兵衛についても確認できることを示した。その上で、矢野が述べている「『南進』日本人」だけではなく、ホイアンという場所（地理的記憶の場）もまた南進と「大東亜共栄圏」を象徴する資源として動員されたことを明らかにした。地理的記憶の場ホイアンは、意味づけを変化させながら、南進・「大東亜共栄圏」の正当化に役割を果たしたといえる。

3 点めに、地理的記憶の場一般については次のように提示できる。すなわち、上でもみたように、ホイアンにおいては心象地理が大きく変化する一方で、記憶の場は新規に創出されるのではなく既存のものに固定されていた。そこには、確立した記憶の場を利用することで表象の正統性をアピールする戦略がうかがえるとともに、様々な表象を包摂する記憶の場の柔軟性が指摘できる。また、心象地理の構築には日本（史）全体と地域との共犯関係がみいだせる。角屋七郎兵衛は中央の関与のもとに郷土伊勢の英雄として確立した。そうした日本史から地域への影響に加え、日本史の物語の変容が郷土誌を嚆矢として起こっている¹¹⁴⁾。七郎兵衛を山田長政になぞらえる議論が伊勢出身者と松本においてまず行われたこと、松阪の地方出版物（『人文的に観た城下町松阪』、1938年）で最初に七郎兵衛やホイアンを大東亜共栄圏に結びつける議論が示されたことがその現れである。

本稿ではホイアンが近代の日本にとって重要な地理的記憶の場であることを論じてきた。さらに事例を積み重ねることで、地理的記憶の場の近代日本社会における特性、あるいは一般的な特性を考察することが、今後の課題であると考えている。

（東海学院大学人間関係学部）

〔付記〕

本稿の内容の骨子は2006年人文地理学会大会（於近畿大学）で発表した。

〔注〕

- 1) ホイアン（會安）はフランス支配下ではフェイフォ（フェフォ、Faifoo、依舗）と呼ばれていたが、独立後は旧称のホイアンに復した。そのような経緯もあり本稿では「ホイアン」と呼ぶ。
- 2) 内田九州男「名古屋情妙寺蔵『茶屋新六交趾貿易渡海図』の検討」（櫻井清彦・菊地誠一編『近世日越交流史—日本町・陶磁器』柏書房、2002）、51-68頁。
- 3) 菊地誠一『ベトナム日本町の考古学』高志書院、2003。
- 4) 日本ベトナム研究者会議編『海のシルクロードとベトナム—ホイアン国際シンポジウム』穂高書店、1993、11-12頁。野間晴雄「アジア『日本町』のかたちと交流史」（野間晴雄編『文化システムの磁場—16～20世紀アジアの交流史』関西大学出版部、2010）、144頁。
- 5) 菊池理夫「角屋七郎兵衛とホイアン日本町に関する研究史・二次資料文献目録」三重中京大学地域社会研究所報21、2009、201-213頁。同「角屋七郎兵衛とホイアン日本町に関する文献目録補遺」三重中京大学地域社会研究所報22、2010、76-84頁。
- 6) ノラ、P. 著、長井伸仁訳「序論—記憶と歴史のはざまに」（ノラ、P. 編、谷川 稔監訳『記憶の場—フランス国民意識の文化＝社会史 第1巻 対立』岩波書店、2002（原著1984））、29-56頁。
- 7) 神田孝治「日本統治期の台湾における観光と心象地理」東アジア研究36、2003、115-135頁。
- 8) 駒込 武「台湾史をめぐる旅（7）芝山巖にて」季刊前夜11、2007、139-146頁。
- 9) 太田秀春『近代の古蹟空間と日朝関係—倭城・顕彰・地域社会』清文堂、2008。
- 10) 荒山正彦「戦跡とノスタルジアのあいだに—『旅順』観光をめぐる—」人文論究50-4、2001、1-16頁。

- 11) 千住 一「ミクロネシアおよび南洋群島表象の歴史的変遷」島嶼研究3, 2002, 47-65頁。
- 12) ①藤原貞朗「第二次世界大戦期の日本と仏領インドシナの『文化協力』—アンコール遺跡の考古学をめぐって (前編)」茨城大学人文学部紀要社会科学論集45, 2008, 107-127頁。②同「第二次世界大戦期の日本と仏領インドシナの『文化協力』—アンコール遺跡の考古学をめぐって (後編)」茨城大学人文学部紀要社会科学論集46, 2008, 21-40頁。
- 13) 前掲10) 10頁。
- 14) 前掲12) ②26頁。
- 15) Gregory, D., “imaginative geographies” in Johnston, R.J., Gregory, D., Platt, G. and Watts, M. eds., *The Dictionary of human Geography: fourth edition*, Blackwell, 2000, p.372.
- 16) 前掲7)。
- 17) 例えば次のような研究があげられる。山下美知子「南進のまなざし—明治20~30年代におけるフィリピンの描き方」総合文化研究3, 1999, 77-99頁。久保田裕子「近代日本における〈タイ〉イメージ表象の系譜—昭和10年代の〈南洋〉へのまなざし」立命館言語文化研究21-3, 2010, 29-41頁。
- 18) 例えば次のような研究があげられる。和田博文ほか『言語都市・上海1840-1945』藤原書店, 1999。堤 玄太「金子光晴のアジア—マレー半島での意識の転位を中心に」アジア遊学50, 2003, 148-159頁。大西成人「第二次世界大戦後の日本における東南アジア認識再考—『ビルマの堅琴』によせて」生駒経済論叢2-2・3, 2005, 249-266頁。
- 19) 加藤麻子「サイゴン=ホーチミン市に再生する新しい文化」アジア遊学51, 2003, 27-35頁。
- 20) 南洋協会編『南洋案内』南洋協会, 1942, 101頁。
- 21) 矢野 暢『「南進」の系譜』中央公論社, 1975, 154頁。
- 22) 記憶の場としてホイアンをみる場合, 近代の日本からに限定されるわけではない。他の時代, 他の記憶の共同体についてホイアンを記憶の場ととらえた研究には次のものがある。①拙稿「ベトナム・ホイアンの観光をめぐる日本の表象」東海学院大学紀要1, 2008, 85-93頁。②大塚直樹「ベトナムの世界遺産ホイアンの観光と日本町の記憶」立教大学観光学部紀要12, 2010, 32-48頁。
- 23) 前掲5)。この目録はホイアン日本町のほか角屋七郎兵衛に関する文献も対象にしており, 本稿よりも収集範囲が広い。
- 24) 青木恒三郎編『世界旅行万国名所図絵 第七巻』青木嵩山堂, 1886, 63-64・221-223頁。
- 25) 関 徳『日本之光輝』青木嵩山堂, 1887。この書の「序」は角屋家当主(角屋幸斎)による。なお, 前掲5)はこの書に言及している。
- 26) 久世兼由『松坂権輿雜集』, 1752。安岡親毅『勢陽五鈴遺響』, 1835。
- 27) 梅原忠蔵「角屋七郎兵衛君」(梅原忠蔵編『帝国実業家立志編』求光閣, 1891), 104-107頁。
- 28) 渡辺修二郎『世界ニ於ケル日本人(増補版)』東陽堂, 1893, 127-128頁。
- 29) 菅沼貞風『大日本商業史 附平戸貿易史』東邦協会, 1892。
- 30) 小中村義象「資料探訪巡回略記(承前)」史学雑誌8-4, 1897, 83-87頁。
- 31) 内田銀蔵「近畿旅中見聞雜録(承前完結)」歴史地理3-8, 1901, 586頁。
- 32) 松木章彦「角谷七郎兵衛の伝」学習院輔仁会雑誌46, 1897, 37-39頁。同「角谷七郎兵衛の伝」学習院輔仁会雑誌47, 1897, 26-35頁。
- 33) 青楓(柴謙太郎)「角屋氏に伝われる外国渡海の図といへるものにつきて」歴史地理6-1, 1904, 67-72頁。
- 34) 高楠順次郎「仏領印度支那地誌」(南條文雄・高楠順次郎『仏領印度支那 一名仏国日南の新領土』文明堂, 1903), 19-39頁。
- 35) 前掲34) 32頁。
- 36) 川島元次郎『徳川初期の海外貿易家』大阪朝日新聞社, 1916。同『朱印船貿易史』内外出版, 1921。
- 37) 川島元次郎『徳川初期の海外貿易家(9) — 朱印船(5)』大阪朝日新聞1911年1月9日。

- 38) 辻善之助「南洋の日本町」学生6-1, 1915, 62-68頁。
- 39) 杉山直次郎「ノエル・ペリーの生涯と業績」日仏文化9, 1944, 149頁。
- 40) ペリ, ノエル「日本町の新研究(一)」学生7-1, 1916, 96-101頁。同「日本町の新研究(下)」学生7-2, 1916, 225-231頁。ペリは角屋がいたのはホイアンであると断定している。
- 41) 遺稿中の附図'MAKIMONO DES CHAYA'には「大正二年五月(写)」と記されている。Peri, P. N., "Essai sur les Relations du Japon et de l'Indochine aux 16 et 17 Siècles" *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 23, 1924, p.XIII.
- 42) 川島は新聞連載時には「交趾国着岸の体絵巻物…今伝はらず」と述べている。川島元次郎「徳川初期の海外貿易家(30) 一本伝茶屋四郎次郎(4)」大阪朝日新聞1911年1月30日。
- 43) 「井上少佐(新嘉坡)小沢大尉(浦塩)伊丹大尉(伯)へ派遣」, 1906年作成, 外務省外交史料館所蔵, <http://www.jacar.go.jp/> (閲覧日2010年12月15日)。
- 44) 小島昌憲「安南国の日本人町とその墳墓」歴史地理26-1, 1915, 50-56頁。
- 45) 瀬川 亀「我が朱印船の安南通商に就て」大阪外国語学校海外視察録1, 1923, 1-27頁。
- 46) 黒板勝美「南洋に於ける日本関係資料遺蹟に就きて」(『啓明会第二十七回講演集』啓明会, 1928), 3-38頁。岩生成一「南洋に於ける日本関係史料調査報告」歴史地理52-1, 1928, 83-85頁。
- 47) 岩生成一「南洋日本町の盛衰(一)」台北帝国大学文政学部史学科研究年報2, 1935, 15-139頁。
- 48) 岩生はダナン日本町について, ホイアンよりも小規模であり, 「或る時期極めて短時日存したのではあるまいか」としている。前掲47) 37頁。
- 49) 尾張茶屋家の檀那寺である情妙寺に原図が, 尾張茶屋家に写図がある。情妙寺ではこの絵巻をたびたび開帳したため, この絵巻の存在は近世から知られていた。尾張茶屋家については, 林 董一『近世名古屋商人の研究』名古屋大学出版会, 1994などを参照。
- 50) 小倉貞夫『朱印船時代の日本人』中央公論社, 1989。
- 51) 前掲2)。
- 52) 穴田秀男「南進の先覚者茶屋氏と交趾貿易図に就いて」商業経済論叢20-2, 1943, 79-89頁。大阪府立図書館編『南方渡海古文獻図録』小林写真製版所出版部, 1943。なお後者は1942年10月「南方渡海古文獻展覧会」の図録である。
- 53) 第3期国定教科書の『高等小学国史 下』(1927年)以降, 「外国との交通」(第36章)の部分に掲載されている。
- 54) 国史絵画(現在は神宮徴古館所蔵, 全78点)については, 小堀桂一郎監修『名画にみる国史の歩み』近代出版社, 2000を参照。「日本人の海外発展」については, 養正館員が「この画は安南ソーラン港附近の日本町の光景である」と解説している(ソーランは現在のダナン)。国史絵画会編『東京府養正館国史壁画集解説』国史絵画会, 1942, 89頁。またこの絵がやはり教科書(『高等小学国史第3学年用』, 1939年以降)の挿絵になっている。
- 55) 永積洋子『朱印船』吉川弘文館, 2001など。
- 56) 矢野 暢『日本の南洋史観』中央公論社, 1979, 52頁。
- 57) 1936年8月7日, 5相会議で南方問題を日本の国策構想に盛り込む「国策の基準」が決められた。そして南進政策を決定づけたのは1941年7月27日, 第2次近衛内閣による「世界情勢の推移に伴う時局処理要綱」であった。前掲21) 147・155頁。
- 58) 前掲21)。
- 59) 南方書は次の文献に記載された文献の数をあげた。遠藤書店編輯部編『南方書の研究と解説』遠藤書店, 1942。
- 60) 大正期の南進論の性格について, 矢野は殖民論ないし日本膨張論の影響があるものの商業主義的であるととらえている。それに対し, 清水はそれを, 「大東亜」戦争期における「南進論」の先蹤とみなしている。矢

- 野暢「大正期『南進論』の特質」東南アジア研究16-1, 1978, 5-31頁。清水 元「大正初期における『南進論』の一考察—そのアジア主義的変容をめぐる—」アジア研究30-1, 1983, 1-53頁。
- 61) 「1万号記念文芸募集」大阪朝日新聞1910年1月5日。なお、同時に募集された新体詩の題は「太平洋の歌」である。
- 62) 辻とペリの文章が載った雑誌『学生』は、後に南進物を多数執筆する西村真次の編集によるもので、南進を推奨する傾向が強い。
- 63) 越村長次『南洋渡航須知』南洋協会台湾支部, 1919。ただしホイアンをダナンと混同している。
- 64) 前掲56) 168頁。
- 65) 岩生の研究の刊行は1935年でこの時期に当たる。前掲47)。なお、岩生の研究は南進の学術研究を担った台北帝大で行われ、まさに南進論の一環とみることができる。
- 66) 前掲56) 161頁。
- 67) 角屋七郎兵衛のような歴史上の人物もノラのいうところの記憶の場とみることができる。ただし、ここでは主たる記憶の場ホイアンに対し副次的な存在と位置づけておきたい。
- 68) 「市川団十郎と角屋七郎次郎」(松阪市史編さん委員会編『松阪市史第14巻 史料篇 近代1』蒼人社, 1982年), 353-354頁。初出は伊勢新聞1878年7月28日。この作品は河竹黙阿弥脚本の「松栄千代田神徳」。
- 69) 前掲24) 221-224頁。
- 70) 神宮外宮の神宮家(上級社家)である松本男爵家の一族であると考えられる。
- 71) 大西源一「角屋氏の航海図につきて」三重県史談會々誌2-1, 1911, 16頁。
- 72) 三重県『先賢遺芳』三重県, 1915, 125-126頁。
- 73) 松阪町立松阪第一尋常高等小学校『郷土人物事蹟調査』松阪町立松阪第一尋常高等小学校, 1910。
- 74) 神宮徴古館農業館『贈位先賢遺品目録並講演要領』神宮徴古館農業館, 1929。
- 75) 桜井祐吉『安南貿易家角屋七郎兵衛附松本一族』角屋七郎兵衛贈位報告祭協賛会, 1929。
- 76) 「贈位される先賢百名内外 三重県の有力候補者十六名」伊勢新聞1928年11月5日。角屋七郎兵衛は「有力候補者」に含まれていない。
- 77) 神宮徴古館農業館『神宮徴古館農業館陳列品図録』神宮徴古館農業館, 1941, 48-49頁。
- 78) 徴古館への寄託された文書類について、桜井は「明治42年其筋の紹介により、当代の角屋七郎次郎氏より提出したる遺物目録」と表現している。前掲75) 44頁。
- 79) 松本市立松本尋常高等小学校編『松本郷土訓話集第1輯』交文社, 1912, 69頁。
- 80) 大町桂月『日本百傑 上』日新閣, 1920, 162-163頁。
- 81) 前掲24) 64頁。
- 82) 高橋 惇「仏領インドシナ」(仲摩照久編『世界地理風俗大系第4巻』新光社, 1929) 156頁。
- 83) 山田啓三郎『人文的に観た城下町松阪』中村書店, 1938, 66頁。
- 84) 南方産業調査会編『仏領印度支那』南進社, 1941, 25-26頁。
- 85) 無署名記事のタイトル。朝日新聞1942年5月20日。
- 86) 澤田 謙『山田長政と南進先駆者』潮文閣, 1942。山田毅一『大南洋の全貌』弘道館, 1942。など。
- 87) 前掲32)。前掲79)。
- 88) 前掲56) 188頁。
- 89) 高木 卓「南海譚」文芸8-12, 1940, 86-106頁。同『安南ものがたり』東京出版, 1945。
- 90) 松本の郷土誌のうち2点(1902年, 1936年)は子ども向けだが、ここでの検討からは除外している。
- 91) 朝倉 健・伊藤幾久造「むかし南洋へわたった日本人」(大日本雄弁会講談社編『南洋メグリ(講談社の絵本179)』大日本雄弁会講談社, 1941), 72-76頁。
- 92) 村上莞爾『日本人の海外発展(大東亜少国民文庫)』田中宋栄堂, 1943, 86頁。
- 93) 「堺の貿易商人の墓碑」歴史教育1-5, 1927, 116頁(この文章は大阪朝日新聞の記事の引

- 用と思われる)。「安南の史的記念物に指定された邦人の墓」大阪毎日新聞1929年7月31日。
- 94)『堺市史』で詳しく紹介されている。堺市『堺市史第二巻本編第二』堺市, 1930, 434-436頁。また, 1941年に堺市で開催の「南洋展覧会」では, 具足屋招来の「シャム伝来天道仏」が展示されているほか, 他の貿易商人と並んで「南方開発物故先覚者」として慰霊祭の対象になっている。堺市『堺市史 続編第2巻』堺市, 1971, 876頁。
- 95) ただし, この文献ではホイアンはダナンと混同されている。越村長次『南洋渡航須知』南洋協会台湾支部, 1919, 544頁。
- 96) 前掲82) 155-156頁。
- 97) 台湾総督官房調査課編『南洋年鑑』南洋協会台湾支部, 1929, 402頁。
- 98) 前掲83) 66頁。
- 99) 金子辰太郎「仏印は招く」海を越えて4-4, 1941, 13頁。
- 100) 中田千畝『南方外交史話』日本國際協會, 1942, 299頁。
- 101) 佐藤秀男『南方の歴史』清水書房, 1943, 202頁。
- 102) ハウスホーファー, C (佐藤莊一郎訳)『太平洋地政学』岩波書店, 1942 (原著初版1924), 146頁。
- 103) 国松久弥『新南洋地誌』古今書院, 1941, 44頁。佐藤弘編『南方共栄圏の全貌』旺文社, 1942, 93頁。
- 104) 福間良明『辺境に映る日本—ナショナルリティの融解と再構築』柏書房, 2003, 329-334頁。柴田陽一「小牧実繁の『日本地政学』とその思想的確立—個人史的側面に注目して」人文地理58-1, 2006, 11頁。
- 105) 村本達郎「大東亜戦争の地政学的性格」地理学10-6, 1941, 97頁。
- 106) 室賀信夫『印度支那 佛印・タイ・ビルマ・英領マレー (世界地理政治大系3)』白揚社, 1941, 124頁。なお, 室賀は小牧実繁名義で当時発表された別の論文でも (地名は明記されていないが) ホイアンに言及している。室賀信夫「西貢港の地政学的位置に就きて」空間・社会・地理思想6, 2001 (原著1941), 106-112頁。
- 107) 1909年に現地を訪れた小島は, 多数の日本人の墓碑がその6年前の鉄道工事の際に資材として持ち去られたことを聞き伝えている。前掲44) 54頁。
- 108) 高瀬要一「ベトナム ホイアン市日本人墓の発掘調査と保存修復計画」日本歴史605, 1998, 97-105頁。「安南『フェイフォー』ニ於ケル『具足君』ノ墓地関係 昭和三年一月~五年一月」, 1928~1930年作成, 外務省外交資料館所蔵, <http://www.jacar.go.jp/> (2010年12月15日閲覧)。
- 109) 前掲22) ①。
- 110) 南部仏印進駐後にどれだけの日本人がホイアンを訪れたかは不明である。いくつか記録が出版されているほか, 報道班員として仏印を訪れた林芙美子もホイアンを訪れたと考えられる。林芙美子『浮雲』新潮社, 1953 (初版1951)。中川成美「林芙美子—女は戦争を戦うか」(神谷忠孝編『南方徴用作家—戦争と文学』世界思想社, 1996) 256頁。
- 111) 1958年にホイアンを訪れた梅棹は, 警察署長の話として「この町には, 日本人の子孫と自称する人もたくさんいるということである」と記している。梅棹忠夫『東南アジア紀行』中央公論社, 1964, 279頁。また小倉は1985年にホイアンを訪れ, 当時のホイアン史跡保存事務所副所長が旧市街中心部の33棟は「日本人の住んでいた跡」とであると説明していることを紹介している。前掲50) 66頁。
- 112) 前掲22) ①。
- 113) 小森陽一『ポストコロニアル—思考のフロンティア』岩波書店, 2001。
- 114) 郷土誌に對外進出に関わる先鋭的な言説が早く登場することは, 肥前名護屋城の南進基地としての記述にも確認できる。拙稿「名護屋城跡と近代の日本」歴史地理学51-5, 2009, 62-63頁。

The Japanese Settlement in Hoian as a Memorial Spot of Modern Japan

OHIRA Teruhisa

This paper focuses on the relationship between Japan and Hoian in the modern ages, namely, from the Meiji Restoration (1868) to the end of the Pacific War (1945). Hoian is a port in central Vietnam, which housed a Japanese settlement (*Nihonmachi*) in the 16th-17th Centuries accompanied with the vermilion-seal certificate trade. Japan had advanced southward (to Southeast Asia and the Pacific Ocean) in modern ages. The history of the relationship between Japan and Hoian was introduced by a wealth of publications on Japan, and many Japanese visited Hoian at that time. However, such relations between them in modern times are hardly referred to today.

In this paper, I regard Hoian as a ‘memorial place’, namely, a place which played a role in the re-composition of the past in modern Japan. The memorial place is an influential concept by the French historian, Nora. It means something on which collective memories are based as well as a spatial place concerned with human geography. Regarding a location as a memorial place means emphasizing that the construction of the place is an issue of identity, and implying that the place and memory are mutually inter-dependent.

To clarify Hoian as a memorial place in modern Japan, I examined how Hoian was described in Japan. In other words, I collected 112 publications on Hoian published in Japan from 1868-1945 and viewed them. The results are the following three points:

1) As for Hoian’s ‘Imagined Geography’, namely, representations of the memorial place, the transformation can be distilled, namely, the early representation of Hoian as a “nostalgic” place for Japanese, and the post-1936 representation of Hoian as a resource for justifying the Japanese advancement Southward and the ‘Greater East Asia Co-prosperity Sphere’. Moreover, they clarify that the formation of the Hoian’s imagined geography was strongly related to the exceptional view on Kadoya Shichirobe, who was a leader of the Japanese settlement of Hoian in the 17th century, and that the transformation of Hoian’s imagined geography is almost parallel to that of the view on Kadoya Shichirobe, namely, from local to national hero corresponding to the real politics. In addition, the Japanese-imagined geography of Hoian has influenced the present Hoian itself through the repair of Japanese graveyards to make them historical monuments (1928) and tourist resources reflecting the memory of Japan in recent years.

2) As for the representational strategy used for the Japanese advancement southward, it is shown that the idolization of the anticipators occurred to Kadoya Shichirobe, Hoian, after 1936. Besides it is also shown that not only idolized persons but also the place or Hoian was used as a resource symbolizing the advancement southward and the ‘Greater East Asia Co-prosperity Sphere’.

3) On the memorial place in general, it is proposed from the case of Hoian that the memorial place was fixed while the imagined geography had been transformed. The strategy promoting the legitimacy of representation by using an established memorial place, and the flexibility of the memorial place subsuming various representations can be pointed out. Moreover, the complicity of the nation and locality can be found in the construction of the imagined geography. Kadoya Shichirobe was established as a local hero with notice of the national academic community of history. In addition to such national influence on the locality, it can be pointed out that the narrative of the nation was initially transformed in local publications. That is, comparing Kadoya Shichirobe with Yamada Nagamasa, the Japanese attained an exalted status from a condottiere in Thailand in the 17th century, and relating Kadoya Shichirobe and Hoian to the ‘Greater East Asia Co-prosperity Sphere’, which was first done in Shichirobe’s country or by natives of there.

Key words: memorial place, Japanese settlement (*Nihonmachi*), modern ages, Vietnam, Hoian